



小学1年生のクラスで、卵の殻を使って絵画を作成

広報ひの2010年2月号のキラリ人でご紹介した浦田広美さん。現在、青年海外協力隊員としてボリビアに赴任されています。浦田さんから届いたメッセージをご紹介します。



浦田さんのブログ

<http://hiromiurata111.blogspot.com/>

日野の皆さんお元気ですか?ボリビアに来て、すっかりこちらの生活にも慣れました。

まずは、皆さん、ボリビアという国のことをご存じでしょうか?正式国名、ボリビア多民族国は南米のちょうど真ん中に位置する内陸国です。面積は日本の約3倍、人口は日本の人口の13分の1の1022万人です。

私の生活するプレスト村は、渓谷地帯に位置するボリビア南部のチュキサカ県にあります。人口1万人の村ですが、面積はとても広く、集落部へ行く時は車で4時間かけて行くこともあります。プレスト村はケチュア民族の村で、住民はケチュア語とスペイン語を話します。男性は農業に励み、女性も農作業を手伝いながら子どもを育て、家事をします。羊の毛を紡いで織物や編み物もしています。女性はチョリータと呼ばれる三つ編みにブラウス、ブリーツスカートという格好を皆しています。今でも薪を使ってパンが焼かれていて、朝起きて窓を開けると、村中あちらこちらでパンを焼く煙があがっています。食事はトウモロコシ、ジャガイモが主食で、鶏肉や牛肉、豚肉とサラダ、それにヤファアという辛いソースをつけて食べます。この地域で栽培されたものがほとんどで、野菜の味が本当に美味しいです。特にトウモロコシとじゃがいもは素朴な甘さがあって、飽きません。

プレスト村での今の私の仕事は、村の美化です。自然にあふれた美しい村ですが、住民はゴミをポイ捨てる習慣があつて、村はゴミであふれています。環境教育を学校でしたり、リサイクルを住民に伝えたり、ゴミ処理システムを村に取り入れるように紹介したり、といった活動を通して、プレスト村のゴミを減らし美しい村にすることが目標です。

温かい人々に支えられて、私は元気に生活しています。皆さんもお体に気をつけて。

感雑向綿

日野町長 藤澤 直広

関西空港から2時間、霧がかすむ韓国仁川空港に着いたのは10月11日の午後。片側4車線の高速道路を走る山間から収穫前の稲田を眺めつつ3時間で夕暮れの

扶餘に到着。扶餘は、かつて百済の都として栄えたまち。百済は滅亡しましたが、その頃活躍された鬼室福信将軍が扶餘郡恩山面の別神堂にまつられています。その子、鬼室集斯は、日本に渡来し日野町小野の鬼室神社にまつられています。こうした縁で姉妹都市交流を行っており、お招きいただきました。

恩山面は人口5800人の行政区。翌日、恩山面事務所を訪問し鄭東賢面長さんらと懇談。つづいて別神堂を訪問し別神祭保存会長さんらとお会いしました。資料館には1930年代の祭りの写真も掲げられています。写真に日本の「役人」が写っていることを保存会長が指摘されました。当時は日本の植民地であったことを再認識。以前、ガイドさんが「韓日合併36

年」という言葉が使われましたが、1910年から1945年まで日本が植民地支配した期間のことです。そして戦後65年が経過し、今年には韓国併合100年の年。保存会長は、日本語が話せるようでしたが、あまり使われませんでした。両国の間の近代史の重みを実感しました。つづいて学校を見学、

幼・小・中の学校が併設されました。1学級は34人定員で、給食も完備、スクールバスもありました。どの国も子育てや教育に力をいれているのだと思いました。午後からは、世界大百済典を見学。17年間をかけて、奈良の平安遷都1300年祭で再現された大極殿のような建物がいくつも再建されていました。百済文化に対する熱い思いと誇りの表れだと思いました。その夜の交流会は大いに盛り上がりました。顔や姿も、稲作や漢字などの民俗も多くの共通点があります。これまで歴史をしっかりと学び、隣国同士の草の根の交流を広げ、親善をはかることが、平和な国際社会の実現につながると確信し、実感した2泊3日の旅でした。